# バレエ『白鳥の湖』舞台衣装のデザイン・制作

## ―フープランドスタイルの王妃の衣装―

富田　弘美

バレエ『白鳥の湖』に登場する第１幕、第３幕の王妃の衣装デザイン・制作を目的として物語の把握、時代設定、演出･振付家の意向、役柄の特徴、衣装デザイン、材料、縫製、舞台上での衣装確認等を行い、以下の結果を得た。

衣装の時代背景はゴシック後期、14 世紀後半～ 15 世紀前半と設定し、当時の女性の衣服として登場したフープランドスタイルを基にした。このスタイルは、貴族のステータスとして生地を豊富に用い、高価な毛皮でトリミングを施し、袖口が大きく丈の長い袖、ほっそりとしたシルエットのタイトな袖（15 世紀前半）、曳き裾があるなど、この時代の特徴を入れて王妃の優雅さ、豪華さ、華やかさを表現した。特に王妃の役柄では、手の動きによるパントマイムの表現が重要になり、たくし上げたスカートの裾を縫い留め、両手を動かせるような衣装設計が必要である。

キーワード：バレエ　舞台衣装　白鳥の湖　フープランド　王妃

### １．はじめに

バレエ『白鳥の湖』は、初演 1877 年モスクワのボリショイバレエ団によって公演されたが不評に終わった。その後、作曲のチャイコフスキーが亡くなった後、1895 年にサンクトペテルブルクのマリンスキー劇場バレエ団、演出･振付は M. プティパ、L. イワーノフ、プルメイスティルよって再び上演され、白鳥の優雅さを表現した衣装、幻想的な雰囲気が漂うコールド・バレエ（群舞）の美しさ、ダンサーの驚異的な技などが評価されて後世に残る名作になった。

また､日本においても 1946 年（昭和 21 年）8 月、戦後わずか１年後に東京帝国劇場にて東京バレエ団が日本初の『白鳥の湖』全幕上演し、公演期間を延長するほどの反響を呼んだ[1)]。

舞台衣装に関する研究では、オートクチュールデザイナーによる歌手の衣装、著者によるバレエやオペラの舞台衣装のデザインの特徴と制作技術に関する考察はあるが[2) 3)]、バレエ衣装の役柄や場面設定、時代背景などからデザインおよび制作に関する考察はない。

本報では、2016 年 12 月 20 日、21 日、シアター 1010、演出・改訂振付は中原由美子氏によるバレエ公演『白鳥の湖』全４幕の第１幕と第３幕の王妃の舞台衣装、フープランドスタイル２点について、実際に学生と共に時代設定、演出・振付家の意向、役柄の特徴などを検討し、デザインおよび制作を行った作品について報告する[4)]。

### ２．方法

２－１　衣装デザインの設定

①物語の把握とデザイン決定

物語のあらすじは、英国ロイヤル・バレエ団の DVD 等[5) 6)]、西洋服飾史等の文献を参考にし、役柄、衣装の色彩と素材の効果、演出効果、登場者の順序、組み合わせや人数などを把握した。次いで、時代背景を物語の内容から設定し、デザイン画にまとめた。

東京家政学院大学現代生活学部生活デザイン学科

②衣装と演出・振付

演出・振付担当者の意向や身体の動き、出演順序、出演前の着替えの時間等を打ち合わせてデザインを決定した。

### ２－２　衣装の制作と管理

①衣装制作の流れ

衣装制作は身体サイズの採寸、製図、材料設定、裁断、仮縫い合わせ、1回目の仮縫い点検、補正と修正、本縫い、2回目の仮縫い点検を行って仕上げた。

②衣装の管理とフィッティング

舞台上の通し稽古、照明合わせでは、ダンサーの動作による衣装のシルエットや身体の動きやすさ、照明による色彩効果などを確認し、補正・管理（丈、幅の調整、アイロンかけ、汚れ落とし、後ろ開きの縫い合わせなど）を楽屋で行った。

## ３．結果および考察

### ３－１　物語の把握と時代背景

①あらすじ

第1幕では、王子の成人を祝う祝宴が催され、王妃からお祝いの弓を贈られて、王子は明日の舞踏会で花嫁を選ぶようにと言い渡される。あまり気のりがしない王子は、友人とその弓を持って湖に狩りに出かける。

第3幕では、各国の姫たちが花嫁候補として招かれて、王子が婚約者を決める華やかな舞踏会の場面である。

②時代背景

あらすじから時代背景をみると、王妃が贈った弓のようなものはクロスボウ（弓の一種）に似たものであろうと考えられる。銃は、1308年ジブラルタル包囲戦（レコンキスタ）でスペイン軍が使用したという記述があるが[7]、14世紀の多くの銃は不完全で戦いには実用性が低く、弓やクロスボウなども使用されていた。その後15世紀～16世紀のヨーロッパにおいて、火縄銃が実用性のある戦いの道具になっていった[8) 9)]。

これらから、銃は趣味的な狩りに使用されるほど普及されてはいなかったと判断し、この時代をゴシック後期（14世紀後半～15世紀前半頃）と設定した。

ゴシック様式の建築物や外観の特徴は、鋭角的な塔と尖頭アーチが使用され、尖頭形は服飾にも影響をあたえ、つま先の尖った履物や高々と尖った被り物などに見られる[10]。

③衣服の素材背景

13世紀以降の服飾の素材は、柔らかく、しかも重いものが多く使用された。例えば、ヨーロッパで扱い馴れている羊毛、高価な輸入品であったラクダの毛織物、さらにフランネルやサージ、イタリアではジャージが生産され、リネン製品は、薄いローン地から厚いキャンバス地、綿織物は多数の織物が生産され、織物工業の品種、量増え、質が良くなって発展した。さらに綿織物は貴重な輸入品の他に値段が下がり、入手し易くなった。

このような素材の背景には、産業都市のカレー、フランダース、ウィーン、イタリアとの道路とヨーロッパの交通要地であったシャンパーニュが繋がって市ができたからである。また、スペインやアフリカからの皮革業者、地中海の染料とミョーバンを扱う商人、フランダースの織物職人、イングランドの羊毛商人などが集まり、特にセーブル（黒テン）、フォックス、ビーバー、キャット、ラム、リス、アーミン（白テン）などの毛皮のおしゃれは、最も贅沢で高級な趣味として珍重された[11]。

衣服の形や材料も複雑化し、女子も交えて細分化して縁飾りつけ、髪飾り作り、衣服の裁断と仕立て、毛皮類の仕立て、バックルやブローチなどの金属細工、染色業、毛皮のなめし業、靴作り、手袋作りなどがあった[10]。

④女性の服装

14世紀後半～15世紀前半の女性の服装は、フープランド（Houppelande）という衣服で（図1）[12]、床まで垂れる袖口、ハイ・ウエストの緩やかなスカートと曳き裾、ウエストの装飾用のベルトなどが付いており、さらに衿や縁飾りには、保温性ではなく、装飾として豪華な毛皮がトリミングされていた。

その後15世紀前半には、顔は小さくくっきりとした顔、なよやかにしなるようなスタイルで柔らかく裾を曳き、楚々として優美な魅力、女性らしくほっそりとしたカーブの柳腰型などを求める

『FRENCH FASHION 15TH TO 19TH CENTURIES　Paris Fashion』より
図１　エナン帽を被ったフープランド着用（1450 年）

傾向がみられた。そこで、身頃や袖のシルエットがタイトになり、先の尖ったエナン帽（Hennin）には軽やかなヴェールのような布が付いていた。このフープランドは、フランスから流行した男性の踝丈のオーバーコートが基になったものである[10) 13) 14)]。

２－２　衣装デザイン

①デザインコンセプトと衣装構成

①－１　第１幕の王妃の衣装デザイン

図２は、城の前庭で催された王子の成人の祝宴場面における王妃の衣装である。デザインコンセプトは、第３幕の婚約式の華やかさと対比させ、また、庭の自然な木々に馴染むように、色彩と素材は深緑のベルベットにして落ち着いた雰囲気を表現した。ドレスは、14 世紀後半の特徴である約 80cm の曳き裾が付いたフープランドスタイル、袖はタイトスリーブ、ハイ・ウエストにはグレーのバックサテンベルトをアクセントとして付けた。さらに茶色のファーで衿、袖口、裾に縁飾りをし、貴族の富とステータスを表現した。

①－２　第３幕の王妃の衣装デザイン

図３は、王子の婚約式場面における王妃の衣装である。コンセプトは、各国の花嫁候補や客人が大勢登場するので、ステージ上で王妃の衣装が最

図２　第１幕の王妃の衣装のデザイン画（左）
図３　第３幕の王妃の衣装のデザイン画（右）

も優美で華やかに引立つように表現した。素材は、鮮やかなエンジ色に金糸の柄が入った重厚感のある織物で、曳き裾があり、袖は、特にこの時代の特徴である大きな袖口と床丈ほどの長さにした。衿、袖口、裾にはグレーのファーで縁どりをし、ハイ・ウエストには金色の光沢のあるラメ素材のベルトを付けてアクセントとした。さらに内側のスカートは、黄色のバックサテンシャンタンで、裾には金色のチュールレースを付けて豪華さを出した。

②衣装の材料

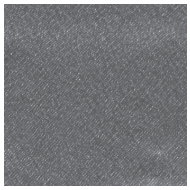
②－１　身頃の裏打ち布

裏打ち布は、水通しをしたやや厚手の木綿生地（白、ツイル）を使用した。これは、バレエは大量の汗をかくので表に滲まないこと、激しい動きや舞台衣装として繰り返し着用することに対して丈夫にすることからである。

②－２　第１幕の王妃の衣装の材料

図４は第１幕の王妃の衣装の生地である。身頃、スカート、袖、エナン帽は、(a) の深緑のベルベット（ポリエステル 53％、ナイロン 33％、ポリウレタン 14％、布幅 145cm）、ウエストベルトは、(b) のシルバーグレーのバックサテン（ポリエステル 100％、幅 112cm）に (c) の金色のブレードを付けた。エナン帽には、頭頂より (d) の白ロマンチックチュール（ポリエステル 100％、幅 110cm）を

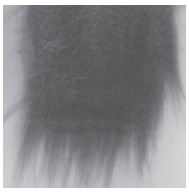
(a) ベルベット



(b) バックサテン

(c) 金色のブレード

(d) チュール

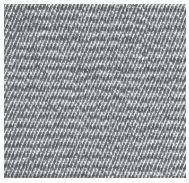


(e) 茶色のファー

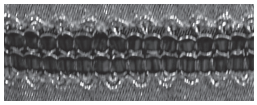
図 4　第 1 幕王妃の衣装の材料

(a) 柄入りの綾織

(b) バックサテン



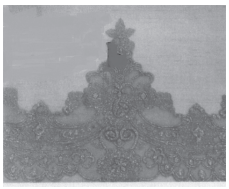
(c) ランドラメ



(d) 赤いブレード

(e) グレーのファー

(f) 金色のモチーフ



(g) チュールレース

図 5　第 3 幕王妃の衣装の材料

2m さげた。縁飾りの毛皮には、(e) の茶色のフェイクファー（アクリル 100％、毛足 3 ～ 4cm、幅 150cm）を付けた。

②－ 3　第 3 幕の王妃の衣装の材料

図 5 は、第 3 幕の王妃の衣装の生地である。身頃、スカート、袖は、(a) の金色柄入りの綾織（ポリエステル 100％、幅 100cm）、ベルトは、(c) の金色サンドラメ（レーヨン 70％、ポリエステル 30％、幅 92cm）に（d）の赤いブレードを付けた。

アンダースカートは、(b) の黄色のバックサテン（ポリエステル 100％、幅 112cm）で、裾には (g) の金色のチュールレースを付けた。縁飾りの毛皮には（e）のグレーのフェイクファー（アクリル 100％、毛足 3 ～ 4cm、幅 150cm）を付けた。胸元の装飾は（f）金色のモチーフ（ポリエステル 100％）である。

## 3 － 3　衣装の製図と制作

図 6 は、第 1 幕と第 3 幕のフープランドの製図である。身頃は後ろ開きでタイトフットしており、衿ぐり、裾にフェイクフファーを a ～ d の毛並方向で付けた。ハイ・ウエストには、8cm 幅の装飾的なベルトを付け、その中央にブレードを縫い付けた。

第 1 幕でスカートは、ウエストからミドルヒップにかけて身体にフィットしているが、裾には布幅を最大に使用した裁ち方でフレアーを入れた。また、型紙上で A、B の脇線を突き合わせにして C、D の線で切り離し、前中心はわ（輪）で裁っているので 5 枚はぎスカートになっている。後ろスカートは約 80cm の曳き裾があり、ステージ上で裾が折れて絡んだりしないように直径 2.5cm、

約 8g のおもりを 11 個縫いつけた。

なお、第 3 幕のフープランドのスカートの下にはアンダースカートがあり、そのスカートは E、F が裾線になるが、フレアーの入れ方はもう一方と同様に裁断した。さらにこのスカートの裾には、チュールレース（図 4 の（g））を付けて、上のエンジ色のスカートをたくし上げた時に、アクセントカラーとして黄色と豪華なレースが覗くように、一部をつまんで縫い付けた。

図 7 の第 1 幕のフープランドの袖はタイトスリーブであるのに対し、図 9 の第 3 幕の袖は、袖口が 93cm で袖底まで大きく開いており、ファーの幅 10cm まで三角形の斜辺になっている。

図 8 は、第 1 幕の衣装で被るエナン帽である。本来、エナン帽は先が尖っているものだが、円錐形の高さによって、ステージ上の動きでは後ろに引かれて不安定であった。さらに頭髪に固定したり、外したりするためには時間を要することから、上部 1/3 を（前 20cm 後ろ 30cm の高さ）斜めに切り落とした変形エナン帽に変更した。

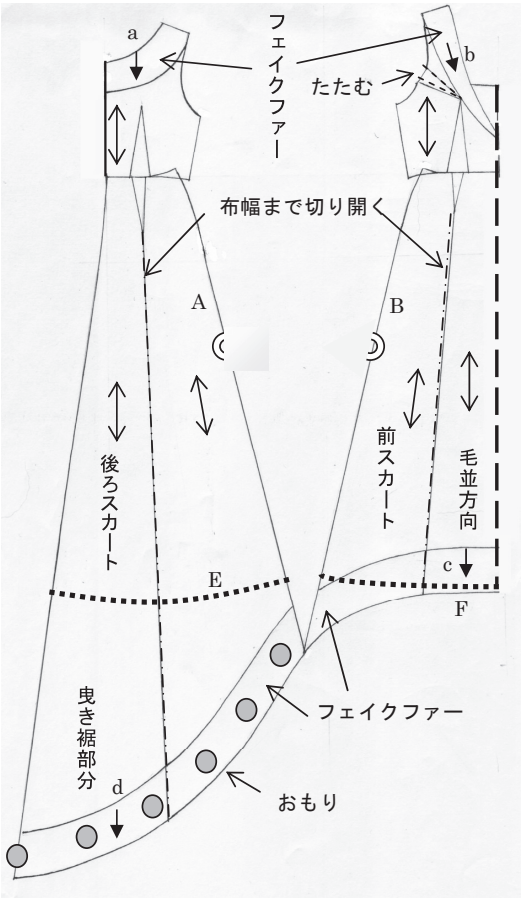



図 6　第 1 幕、第 3 幕のフープランドの製図

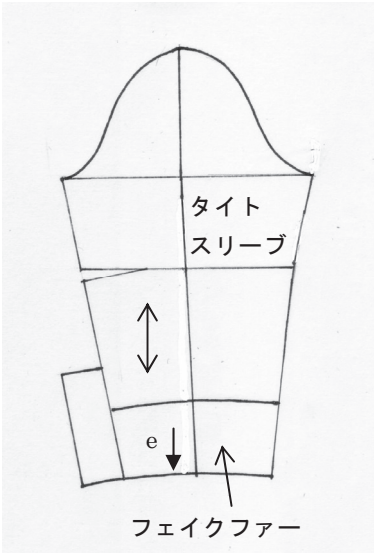



図 7　第 1 幕のタイトスリーブの製図

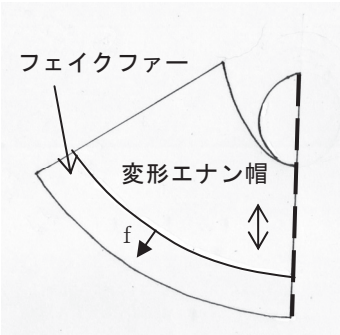



図 8　第 1 幕の変形エナン帽の製図

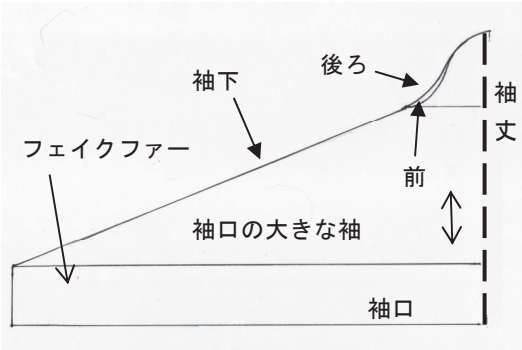



図 9　第 3 幕の袖口の大きな袖

図 10　第 1 幕の完成した王妃の衣装
前面（下）、後面（上左）、側面（上右）

### 3－4　完成した王妃の衣装

14 世紀後半～ 15 世紀前半の女性の衣服であるフープランドは、ほっそりとしたタイトな身頃、とハイ・ウエストからミドルヒップにかけてフィットし、ゆったりと広がる曳き裾のあるフレアースカートである。図 10 と図 14 は、貴族のステータスとして布を豊富に使用し、高価な毛皮をトリミングする傾向を取り入れた衣装である。

図 11　第 1 幕の王妃の衣装の胸元の装飾

図 12　第 3 幕の王妃の衣装の胸元の装飾

図 13　ヴェールの付いた変形エナン帽

袖の形態は、第 1 幕ではタイトスリーブでほっそりとしているが、図 15 のように滑稽なほどに袖丈が長く三角形に広がる袖口になっており、袖口にはファーをトリミングした。一般に袖の長さは、身分や社会的な地位などを表現しており、和服の袖の長さや形態にも通じるものがある。

胸元の装飾は、肩からファーがハイ・ウエストまで三角形に付いており、中心の胸当て部分は、レース上にストーンを散りばめ（図 11）、金色のモチーフ（図 5 の（f））とストーンを付けて、照

図 14　第 3 幕の完成した王妃の衣装
前面（下）、後面（左上）、側面（右上）

明による輝き効果を入れた（図 12）。

図 13 は変形させたエナン帽で、後ろの頂点よりヴェール（図 4 の（d））を 2m 垂らした。

### 3－5　バレエ公演の衣装

図 16 は、2016 年 12 月 20 日、21 日シアター 1010 にて開催されたクリスマス第 6 回公演バレエ・フレイグランス『白鳥の湖』全 4 幕の様子である。

原振付は M. プティパ、L. イワーノフ、プルメイスティル、演出・改訂振付は中原由美子氏で、王妃役は中原由美子氏　第 1 幕（上左、中央）、第 3 幕（上右、下）である。

衣装の生地、色彩、すなわち深緑のベルベットとエンジ色に金色の織柄などの素材感が、第 1 幕（城の前庭の成人の祝い）と、第 3 幕（華やかな婚約の舞踏会）の場面の違いを明確に表現していた。さらに、当時の貴族が豊富に生地を纏い、高

図 15　第 3 幕の大きな袖口のフープランド

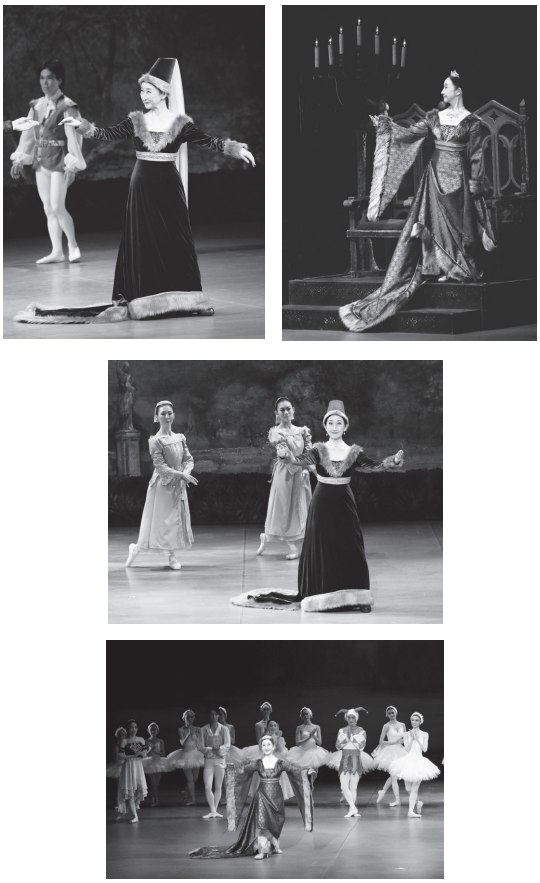


図 16　バレエ・フレイグランス公演
『白鳥の湖』第 1 幕と第 3 幕

撮影：和田 修

価な毛皮を身に着けることをステータスにしていた時代をより反映させていた。

また、長い曳き裾に数個のコイン状のおもりを縫い付けることで、ステージ上でターンをしても裾の折れ曲がりや重なりがなく、大きく弧を描くように広がっていた。

王妃の役柄は、手の動きによるパントマイムの表現が重要になるので、特に第３幕の衣装のように（上右）、たくし上げた裾を縫い留めて、両手を動かせるような衣装設計が必要である。

エナン帽の上部を切り取ることで、頭部にのせたときに安定感が増し、髪に固定しやすくなった。

## ４．まとめ

バレエ・フレイグランス公演『白鳥の湖』第１幕と第３幕に登場する王妃の衣装デザイン・制作を目的として、文献による物語の把握、時代背景の決定、演目内容と演出、衣裳デザイン・制作、舞台上での衣裳効果などを確認し、以下の結果を得た。

①時代背景は、あらすじより王妃から王子が弓を贈られることから、銃が生産される前の時代として、14 世紀後半～ 15 世紀前半のゴシック時代と設定した。

②衣装デザインのコンセプトは、第３幕の婚約式の華やかさと対比させるために、第１幕では庭の自然な木々に馴染むように、色彩と素材は深緑のベルベットにして、華やかさより落ち着いた雰囲気を表現し、第３幕では各国の花嫁候補や客人が大勢登場するので、王妃の衣装が最も優美で華やかに引立つように表現した。

③ 14 世紀後半～ 15 世紀前半の女性の衣服であるフープランドは、ほっそりとしたタイトな身頃、とハイ・ウエストからゆったりと広がる曳き裾のあるフレアースカートで、貴族のステータスとして布を豊富に使用し、高価な毛皮をトリミングする傾向があった。

④王妃の役柄では、手の動きによるパントマイムの表現が重要になるので、特に第３幕の衣装のように（上右）、たくし上げた裾を縫い留めて、両手を動かせるようにした。

## 引用文献


1）富田弘美：東京家政学院生活文化博物館年報　第 21 号 pp.21-23（東京家政学院生活文化博物館 2011）

2）砂長谷由香 小橋宏美：舞台衣装にみるオートーニナ・リッチのアシンメトリーベアトップドレスー．服飾文化学会（作品編）6：pp.47-55（2013）

3）富田弘美：バレエ『眠れる森の美女』の舞台衣装のデザイン・制作－青い鳥とフロリナ姫の衣装－　東京家政学院大学紀要第 55 号 pp.137-143（2015）

4）中原由美子：クリスマス第６回公演バレエ・フレイグランス『白鳥の湖』全４幕プログラム（フレイグラント・クリスマスプロデュース , 東京 ,2016）

5）英国ロイヤル・バレエ団：DVD.（TDK コア，東京，2009）

6）新国立劇場バレエ団：白鳥の湖
http://www.nntt.jac.go.jp/ballet/swanlake/2014-2015

7）銃の歴史年表
http://hb-plaza.com/guns101/history（2013）

8）中世に発明され歴史を変えた世界の 13 武器
http://karapaia.com/archives/52191444.html（2005）

9）（51）方広寺関連３　銃砲の歴史
https://www.eonet.ne.jp/~shujakunisiki/m-51.html

10）丹野　郁：西洋服飾史 pp.71-73　pp.87-90（東京堂出版 , 東京 ,2007）

11）J･アンダーソン･ブラック：ファッションの歴史（上）pp.165-168（株式会社 PARCO 出版，東京，1985）

12）Pauquet Frrées：FRENCH FASHION 15TH TO 19TH CENTURIES　Paris Fashion pp.4（Dover Publications, Inc.U.S.A 2003）

13）Lynne Elliott：Clothing in the Middle Ages pp.27-29（Crabtree Publishing Company .U.S.A 2004）

14）ジェームス・レーヴァー、監修　飯田晴康、訳　中川晃：西洋服装史 pp.64-86（洋版出版株式会社, 東京, 1991）


（受付　2017.3.29　受理　2017.6.19）